

ポスター発表 | 急性期川崎病治療

⌚ 2025年7月10日(木) 16:10 ~ 17:10 🏢 ポスター会場 (文化会館棟 2F 第1・2ギャラリー) 2

ポスター発表 (I-P03-2)

急性期川崎病治療

座長：齋藤 和由 (藤田医科大学 医学部 小児科学)

座長：関 満 (自治医科大学 小児科)

[I-P03-2-03] ウイルス感染症が川崎病発生数に与える影響：COVID-19パンデミック期間における川崎病発生数に関する分割時系列分析

○石井 卓¹, 山口 洋平¹, 櫻井 牧人¹, 下山 輝義¹, 細川 奨² (1.東京科学大学 小児科, 2.武蔵野赤十字病院 小児科)

キーワード：川崎病、COVID-19パンデミック、分割時系列分析

【背景と目的】 COVID-19パンデミックの期間では、COVID-19以外の流行性ウイルス性疾患の発生が大きく減少した。本研究では、この状況を自然実験として利用し、COVID-19パンデミックの期間における川崎病 (KD) の発生率の変化が年齢、地域によって異なるか、また特定の感染症がKDの発症を媒介するかを検討した。【方法】 毎月のKD症例数と患者情報をDPCデータベースから抽出し、分割時系列分析によりCOVID-19パンデミック開始前後でのKD患者数の変化を年齢・地域ごとに検討した。また、流行性ウイルス感染症の月あたりの定点発生数を用いて、各ウイルス感染症がKDの発生に寄与しているかを媒介分析で検討した。【結果】 日本でCOVID-19に対する初回の緊急事態宣言が発出されたのを境に、生後6か月から4歳の人口10万人あたりのKD患者数の減少がみられた (immediate change -21%, 95%信頼区間 -36%, -4%)。また、5～15歳の患者でも減少が確認された (immediate change -31%, 95%信頼区間 -36%, -2%)。しかし、生後6か月未満の患者では有意な変化は認めなかった。地域別にみると、KD患者数は、北海道、中部、近畿、中国・四国では有意に減少し、関東では有意ではないものの減少していたのに対し、九州では有意な減少が見られなかった (immediate change -2%, 95%信頼区間 -19%, +19%)。COVID-19パンデミック前後の各ウイルス感染症数を元に媒介分析を行うと、咽頭結膜熱がKDを媒介している結果となった (Proportion mediated 51.2%)。【結論】 ウイルス感染症がKD発生に関わっていることが示唆される結果だったが、同時に乳児期早期では関与が少ない可能性が示された。また、ウイルス感染症のKDへの関与は地域によって異なる可能性が示唆された。ウイルス感染症の中ではアデノウイルス感染症がKDの発症と密接に関連していることが示唆された。